

重役養成計画

城山三郎



角川文庫

じゆう やく よう せい けい かく
重役養成計画

しろやまさぶろう
城山三郎



角川文庫 2857

昭和四十六年十二月二十日 初版発行
平成 元 年 四月 十日 三十六版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)八一七—八四五—
営業部(〇三)八一七—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

重役養成計画

城山三郎



角川文庫 2857

第一章

その日まで、大木泰三は名実ともに平凡なサラリーマンであった。

勤務先の大鷲^{わし}造船は、Aクラスの下といった造船会社。本社は丸の内ビル街にある。十年前、私立のQ大を出た庶務課員。きめられた仕事はまじめに果すが、それ以外にこれといった欲もなく、おとなしく会社と自宅の間を往復している。妻の梅代との間に、女の子が一人――。

午後三時過ぎ。

陰気に降りつづいていた雨がやみ、皇居の上の空が明るくなりはじめた。

課長は会議、係長は出張中。外の気象とは別に、部屋の中はけだるいような小春^{びより}日であった。

「今夜、ナイターはむりですかなあ」

古井坂^{こいさか}が、大きくあくびをしながらいった。

大木は回転椅子を回して窓に向かった。上に行くほど濃く墨をにじませた空を端から端まで点検してから、

「どうだろうね。雨は上ったようだが、グラウンドはかわき切らんだろうし」

（相変らず、わかり切ったことを）といった顔で、古井坂はそっぽを向いた。大木はなお空を見ながら、

「むりのようでもあるし、むりでないようでもある。いちばんたしかなのは、球場へ問い合わせてみる事だな」

古井坂は、オコリにでもかかったように顔をふるわせた。眼鏡がはずれそうである。

「いや結構です。何も訊くほどのことは……」

そういつてから、ひとり言のように、

「残念だな。折角、追い上げてきたのに……パールスは、いま絶好のコンディションだ。そういうときに限って、天候に邪魔される。嫉妬深いやつらや、怨念を持つ連中の祈りが、天をくもらせてしまふんだな」

棘のあるいい方であった。

大木はまた空を見た。事、人事に関する限りは黙するに限る。立ち入れば、棘に刺されるだけだ。それより、天を眺めよう。何なら、終業時間まで眺めていたっていい。（東京には本当の空がない）などとうたった詩人もいるが、大木はそれほど気難しくはない。

少々スモッグがかろうが、空は空である。人間たちは勝手に汚しておきながら、空をいまわしいものに見、あるいは、見ようとさえしない。それでは、空があまりにかわいそうだ。つい、泣きべそをかきたくなるではないか。

（かわいそうな空よ）

墨染の衣がちぎれちぎれに飛びはじめた空に向かって、大木は呼びかけたくなった。まわりに人さえいなければ、呼びかけていたかも知れない。

古井坂は、舌打ちし、なおぶつぶついている。まるで鍋なべに入れられた貝のように。貝といえば、社の実力者小貝専務は、パールス・ファン。古井坂のパールスびいきは、そのことと必ずしも無関係ではない。

「イーグルスは全く悪運の強いやつだ。ここでパールスに連破されりや……」
ドアが開き、古井坂の声がとまった。不自然なとまり方であった。
大木はまず古井坂の顔を見た。

こわばった頬、眼鏡の奥で三白眼が気まずそうにまばたいている。

ついで大木は、入ってきた男を見た。

男は顔いっぱい笑い、手を上げた。やや小さな眼、顔のまん中に坐ったりっぱな鼻——営業課の猪野であった。

猪野は、他の課員たちには見向きもせず、大股おおまたに大木の前にやってきた。回転椅子をもとに戻す間もなかった。

小肥りの体が、空をふさいで立った。

「どう、今夜あいてるかい」

鼻を突き出すようにして訊く。大木がうなずくと、

「そりゃよかった。もっとも、まず、あいてるだろうとは思ったが」

「……………」

「ぜひ今夜出てほしいんだ。鴨井がきみとおれと三人で会いたいといってるんでね。いや、お

れ自身もせひ、きみに来てほしい」

「しかし……」

「席はあいつが用意している。赤坂弁慶橋の一杉、有名な料亭だ。知ってるだろ」

「いや、知らんな」

猪野はがっかりしたようであったが、

「何時に行ける？」

「五時だ」

「よし、おれも今日は五時で打切ろう。案内するよ。……それじゃ、また五時に」

大木の肩を一つたたき、さっさと出て行った。姿が入口から消え、しばらくしてから、ドアが音を立ててしまった。

凍結したかと思えた古井坂の口がほどけた。

「大木さんは、いまの猪野さんを御存知ですか」

「うん、大学の同期だ」

とたんに、隣席の緑川松子が叫んだ。

「あら、すごいわね！」

机の向うから、古井坂がねじれた声で訊いてくる。

「どうしてそれを隠してたんです」

「別に隠してたわけじゃない。あいつは横浜と神戸、それにこの三年はニューヨークづめで、

つい半月前、戻ってきたところだ」

「そうだね、すてきだね。あの人……。二十年先には社長さんだって」

「そんなことわかるもんか」

古井坂が叱りつけるようにいった。

「だって、社長さんにすごくかわいがられてるでしょ。ニューヨーク駐在だって、うちの社からは一人きりだし」

古井坂は押し殺した声で、

「社長派であることはまちがいないよ。しかし社長派ということと、社長になれるということとは別問題だ。そうでしょ、大木さん」

ことさら大木に念を押してくる。眼には猜疑心さいぎが満ちていた。

（あなたも社長派ですか。もし、そうだとするなら……）

大木はうなずいて、

「うん、そうだ。将来の社長なんて、わかりっこない」

「あっさりしてるわね。お友だちのために弁護しないの」

「二十年先のことなんて、わかりゃしない。水爆が落ちるかも知れんし、月世界に引越してるかも知れん。だいいち、会社が……」

いいかけて、大木は首をすくめた。

それより空を見ることだ。

雲は急速にうすれていた。皇居の森の上には、水路のように晴れ間がのびている。

明日は晴れるかも知れぬし、晴れぬかも知れぬ。

「夜半に嵐の吹かぬとがな」で、明日の天気もわかりはしない。まして、二十年先の社長のことなど――。

ただ、たしかなことは、明日も、二十年後も、二千年先も、空だけは同じように存在しつづけるということだ。

五時少し前、大木に電話がかかってきた。

電話の主は、鴨井であった。母校のQ大に残って経営学を教えている。というより「もうけるじい入門」など、ベストセラー作者として名高い。

鴨井はせきこんだ声で訊いてきた。

「会社はどう、いそがしい？」

「いや、ひまだよ」

「……ちょっと、このところ景気が悪いからな」
慰めるようにいう。

「いや、こちらはずっとひまなんだ」

鴨井は毒気を抜かれ、

「……相変らずだな。おまえというやつは」

「……………」

「今夜来てくれるそうだな。まちがいなくたのむ。猪野といっしょに来るんだぞ」
「わかってる」

「タクシーは中型以上。なるたけ新しいのを選ぶ。運転手は中年以上。できるだけ、身ぎれいな方がいい。事故に備えても、見栄のためにもな。ハイ、さいなら」

ひとりでしゃべりまくって切れた。

（どちらが相変らずなのか）

と、苦笑がにじんでくる。学生時代から、神経質でお節介で、人一倍気のせわしい男だった。講義はいつも教壇のすぐ前。よく聞きとれるだけでなく、教授が顔をおぼえてくれると、真剣だった。そのおかげか、成績は抜群で、卒業のかなり前から母校の椅子が約束されていた。

卒業式を忘れ、卒業論文も卒業後半年して届けたような大木とは、およそ対照的である。そのくせ、よく気が合った。暴走型の猪野と三人の組合せで、北海道から九州まで貧乏旅行して回ったこともある。

五時二十分ほど過ぎ。空^{から}っぽになった庶務課の部屋でひとり空を眺めていると、猪野がとびこんできた。

お濠^{ほりばた}端に出る。空車は少い。猪野が車の洪水^{こうすい}の中へ泳ぎ入るようにしてつかまえてきたのは、ポンコツ寸前の小型車。運転手は、はでなチェックのシャツを着た若僧であった。安全保障上も、美観上も、鴨井の注文と合致しない。

「いいのかな」

迷っていると、猪野に腰のところを突きとばされた。

車道に落ち、車体にぶつかり、六尺近い長身を骨格見本なみに、腰と首のところで九十度ずつ折り曲げて、ようやくシートに落ちつく。

猪野がタックルでもするように飛びこんでくると、間髪を入れず、若僧はタクシーをスタートさせた。

スリル満点の競走を十五分。

車は緑のもやにまぎれこみ、ついで、水を打った広いたたきの上に滑り出た。料亭の玄関先である。

下り立った猪野を見て、番頭が奥に声をかけた。仲居が左右から走り出る。

大木もつりこまれるように猪野の後を追おうとしたが、

「ヨウ、おっさん、金は？」

若僧運転手に呼びとめられた。猪野はと見ると、仲居にとり巻かれている。

タクシーのメーターは一六〇円。

大木の毎日の小づかいは百円しかない。内ポケットから備荒用にと手渡されていた千円札をとり出して支払った。

下駄をつっかけて、鴨井が下りてきた。その顔にボンコツ・タクシーは青色の煙を吹っかけて走り去った。

「あの車で来たのかい」

鴨井は顔をしかめたが、すぐ氣をとり直し、

「よく来てくれた。今夜は大事な相談があるんでな」

みがき立てられた廊下で、大木は二度ころびそうになった。

奥まった座敷。水銀燈をともした庭が濡縁ぬれえんの先にひろがっている。木立を越して、遠くに隣りの灯が見えた。どこか山小屋へでも迷いこんだような静けさである。

（ここから見る夜空は、多少、山のおいでもするだろうか）と顔をのぞかせようとすると、ふたたび猪野に突きとばされ、床の間を背にした上座に坐らされた。

鴨井は、机の上に何枚ものハガキを書き散らしていた。

「手紙は人間関係の基礎なんだな。この一枚が千円札にも一万円札にも見えてくる」

つぶやきながら、片づけはじめ。大木は、鴨井が海外旅行中、見物もそこそこ、毎日三十枚ずつ絵葉書を書き送るのを日課としていたという神話を思い出した。

手ぎわよく、すぐに酒と膳部ぜんぶが運ばれてきた。

「大事なお客さんからまずどうぞ」

お酌はまず大木に向けられた。

「氣味が悪い。いったい、どうしたんだ」

「遠慮するな。場所は同じでも、猪野のおやじのように不浄の金で豪遊させるわけじゃない。

おれたちの勤勞所得でおごっているんだから」

猪野の父親は、造船疑獄にも名の出たことのある元大臣である。

「しかし同じおごられるなら、ビヤホールの方が氣樂だな。ここで一回おごってくれるより、ビヤホールで十回おごってくれ」

「意味がちがうよ。親友とはいえ、こうして礼を尽くすのには、十分に理由がある」

鴨井はそういつて、猪野を見た。

「よし、おれが説明しよう」

猪野は坐り直した。

「きみに、ある会社の社長になってほしいんだ。いいな？」

「冗談いうなよ」

「冗談じゃない。会社の名前は、株式会社・雄飛経営相談所。資本金五十万円はすでにおれたちで集めた。主な重役は鴨井とおれ。その上に、きみを社長にいただきたい」

大木はあわてなかった。冗談か、さもないければ、すぐに潰れる話にきまっている。

大木は落ち着き払って、訊き返した。

「その会社は何をするんだね」

「リサーチ屋兼セミナー屋、つまり、マーケット・リサーチを請負うとともに、経営教育のセミナーを企画して売りこむ。頭さえあればもうかる商売だ」

「しかし、いうのは簡単だが、実際にうまくやって行けるかい」

「リサーチ屋が成り立つかどうかは、別のリサーチ屋にリサーチさせた。その結果、採算がとれるという報告書が来た」

「それにしたって、どうしてぼくなんかを社長に……。ぼくはリサーチ屋も知らなけりゃ、セミナーにも一回も出たことがない」

大木の声は、いくらかしめった。

セミナーばやりの時勢というのに、大木にはただの一度もセミナー聴講の命令は出なかった。三年後輩の古井坂は、すでに財務分析と職務評価の二つのセミナーに参加している。

セミナーへの出席者は、部課長会できめるが、重役の腹案があれば、そのまま通ってしまう。無色中立の大木はどの重役にもつながらず、ただ黙々と働くだけなので、部課長会でも候補にも上らない様子であった。

大木はセミナーに出ることで資格をつけようとか、目立とうとかは思わない。出席した連中を見てみると、とり立てて仕事の能率は上っているわけではなく、ひとしきり講釈がうるさくなるばかりだ。収穫は期待しないが、同じビジネスマンである以上、一度は人なみにセミナーなるものをのぞいてみたいと思う――。

さかすき 盃の触れ合う音で、大木は感傷からさめた。

「きみを社長に推戴する理由は二つある」

鴨井が、部厚い眼鏡の奥から、磨り減ってしまったような小さな眼を光らせていった。

「一つは、おれたちの仕事にとって、きみのような存在がぜひ必要なんだ」

「よくわからんな。おれのどういふところが……」

「そのとぼけたところさ。ユウヨウ迫らざるところといつてもいいな。猪野は猪突猛进だし、おれは神経質だ。そして、そろいもそろって、あくせくしている。だから、どうしても、きみのような鎮静剤的存在が必要となる。近代経営学の父、家康公の訓話の如く、『あせるべからず』なのだが、二人だけだと、あせりは二乗三乗になるばかりだ。だから、社長にはよほどあせりから縁遠い男、つまり落着き払っていて、どうにも仕様のない男を持って来ようということになった」

「……………」

「これは、当節貴重な性格だよ、『あせるな』と講釈するやつは多いが、性格そのものが講釈になるような例はきわめて稀だ」

大木は溜息をついた。すてたものではない。おれのような性格にも、そういう機能があったのかと、全身を見直したい気持である。

六尺近い長身瘦軀。風吹けば、まっ先に飛ばされ舞い立って行きそうで、どこにも重量がない。社長の器などというものとは、およそ縁遠いはずなのだが――。

「いくらインチキ会社にしたって、おれは社長という柄じゃないよ」

「おい、インチキ会社はひどいぞ」

猪野が銚子をつきつけて、すごんだ。

「マーケット・リサーチと、セミナー主催。これほど近代的な産業があるものか」

鴨井がつづけた。

「第二の理由というのは、きみの名前だ。大木泰三という名前は、いかにも社長の貫禄かんろくがあつていい。猪野では、イノイノイノとなつて、せせこましいし、おれの名前はいかにも人をカモにするように見られて、自分でもうんざりしている。姓名判断上は、経営者としては凶と出ている」

「姓名判断？」

「うん、このごろの易者は、経営者の資格というものまで鑑定してくれる。われわれ経営学者以上にね。……孫子の出てくる時代だから、易者も自信を持って発言できるわけだ」

そういわれてみると、大木はたしかに他の二人よりも、自分の名前が社長の肩書にふさわしいと思った。自信を持ていい。人は妙なところで元気づけられるものである。

「社長というものは、おれや猪野のように、毎日出てきてがりがりやるより、雲の上から舞い落ちたように、ふわっと時たま現れる方が社員に神秘感と権威を感じさせるといふこともある」

（社員）という言葉に、大木は自分の立場を思い出させられた。

「しかし、おれのつとめ先に知れたら、まずいんじゃないか」

「わかりっこないよ。大木泰三なんて、案外どこにもありそうな名前だ。それに、悪いことをするわけじゃなし……。たまに夜、鎮静剤的に顔を見せてもらうだけだもの。いわば友だちづき合いをしているだけだ。つとめには全然影響をおよぼさないし……。会社には、そこまで文句をいわれる理由はないね」